

# 本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

— 国際ボランティア活動の経験から —

社会学部 4年 水野 奨

- |                             |                                 |
|-----------------------------|---------------------------------|
| はじめに                        | 2. 「インド国際ボランティア」を通して            |
| II 多文化共生の時代と国際ボランティアの必要性    | 3. 国際ボランティアサークル「らぶ&ピース」の活動とその精神 |
| III 国際ボランティアのあり方            | IV おわりに —「世界の市民」の育成—            |
| 1. 「国際ワークキャンプ（インドネシア）」の体験から |                                 |

## I はじめに

私たちが今立っている地球は、190以上の国と地域に別れ、60億人以上もの人々が生活している。地域あるいは人によって言語、生活習慣、文化、歴史、信仰、価値観が異なっており、世界は多様性に満ちている。

しかし、20世紀は「戦争の世紀」と呼ばれ、人類は二度にわたる世界大戦を経験した。21世紀へと移り変わる中、「戦争の世紀」から「平和の世紀」、「人権の世紀」と謳われているが、2001年9月11日、21世紀の初頭にしてアメリカで信じ難い同時多発テロ事件が起こり、ワールド・トレード・センターとともにその願いは崩れ落ちてしまった。

私たちは今、前例のない様々な課題に直面している。貧困、飢餓、人口爆発と食糧危機、エネルギー資源の枯渇、地球温暖化、オゾン層の破壊、森林破壊、生物種の絶滅、宗教問題、戦争・紛争・テロなど、世界全体の存亡の危機といえる。それらはもはや一国内の問題ではなく、また一国での解決は不可能となっていることから、地球全体の問題（グローバル・イシュー）として捉えていく必要がある。

近年、このような状況下で、国際協力あるいは国際ボランティアといった活動への関心とその必要性は益々高まってきており、国連や各国政府、NGO（非政府組織：Non-Governmental Organization）団体がそれぞれの特徴を活かして活動している。それらの取り組みの中には、NGO 団体の水源確保事業や農業促進事業により、旱魃や戦争により荒廃したアフガニスタンで失われていた緑が蘇えったり、あるいは医療 NGO の献身的な医療活動及び健康教育により乳幼児死亡数や妊産婦死亡数などが著しく低下するなど、成果が目に見える取り組みも多い。

しかし、現状ではそういった活動への疑問や中傷の声も多い。「なぜ大金を賭けてまで海外に行ってボランティアをするのか」、「日本国内にも問題は山積みなのに、なぜわざわざ海外に行くのか」、「ただの自己満足なのではないか」などである。これは、私自身に問いかけてきた課題でもある。確かに、わが国も少子高齢化社会、ホームレス問題、自殺者の増加、在日韓国・朝鮮人問題、被差別部落問題、米軍基地問題など様々な問題がある。また、ODA（政府開発援助：Official Development Assistance）に関していえば、第Ⅲ章においてインドネシアのコトパンジャン・ダム建設の例を取り上げるが、従来の経済成長優先の政策が、一国内の貧富の格差を助長し、また多くの公害を生み出してきたことを受け、今日では ODA 政策の量から質への転換が求められている。このように ODA や NGO 団体の功罪が語られていることから、上記で述べたそれらの批判を全面的に否定することはできない。

本稿では、それらの非難、批判に応え、さらに筆者の国際ボランティア活動の経験から把握し得た課題に応えることを目的とする。まず、第Ⅱ章において国際ボランティア活動への批判に対する一般論的な反論を、筆者の国際ボランティア活動の理由ないし根源を示すことによって行う。次に第Ⅲ章において、筆者の国際ボランティア活動の経験から把握し得た課題を明らかにし、それに応える方策を探求し、現在取り組んでいる啓蒙活動の意義を示す。そして最後に、第Ⅳ章において、筆者の国際ボランティア活動の経験から考察する「世界の市民」のあり方を展望していく。

本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

## II 多文化共生の時代と国際ボランティアの必要性

本章では、前章で触れたグローバル・イシュー及び国際ボランティアへの非難、批判を踏まえ、私がこれまで国際ボランティア活動に取り組む五つの理由を挙げる。

まずはじめに、〈世界を構成する一人の市民という自覚〉からなるものである。

1996年、平和学の父と称されるアメリカの経済学者ケネス・E・ボールドリングは、地球を宇宙船と同じように一つの生命維持空間に例え、「宇宙船地球号」(Spaceship Earth) という発想を提示した。宇宙船の中にある空気、水、食糧、燃料はすべて有限で、特別な工夫をしない限り、いつか枯渇する時がくる。つまり宇宙船の中では、限られた資源を有効に活用し、また地球環境への負荷を可能な限り少なくするシステムを開発することの必要性を説いた。

また、彼は宇宙船地球号の中を「ファースト・クラス」、「エコノミー・クラス」、「トランクルーム」の3つの段階に分け、経済格差など世界の構造的問題を指摘している。私たち日本を含む先進国「ファースト・クラス」が、限りある資源を消費し、環境破壊を進めてきた。そして飽食に喘ぐ国「ファースト・クラス」が存在する一方で、飢餓に苦しむ発展途上国「トランクルーム」がある。こうした課題を背負う不平等な社会の中で、豊かな国で生きている私たちの価値観と責任が問われており、宇宙船地球号に乗船する『世界の市民』の一人として傍観者であってはならないと考える。

次に、〈日本にも問題が山積みではあるが、世界はより深刻な問題を抱えている〉ためである。

NGO「ペシャワール会」現地代表の中村哲氏の言葉を借りると、《この数年、「日本は大変です」、「不景気です」、「失業者が増えていきます」というように不満ばかりを聞かされているのですが、どうも私にはよくわからない。「不景気で何人くらい餓死者が出たのですか」と聞きますと、「いや、餓死者

が出るまでは行っていません」という答えが返ってくる》<sup>1)</sup> とあるように、問題の危機レベルが大きく異なる。貧困下、戦争下で生活する人々は、明日生きるか死ぬかという切迫した現実の中で生きている。

第三に、同じく中村氏が言う〈《誰もやらなければ我々がやる》<sup>2)</sup> という意識〉である。

これは正義感ではなく、私の場合、役割分担を行っているような感覚からである。少々勝手かもしれないが、少子化や学力低下が叫ばれる日本であるが、国内には高等教育を受け、教養を積み知識や技術を身につけた若者たちがいる（ちなみに、池田香代子・マガジンハウス編集の「世界がもし100人の村だったら2」によれば、大学における高等教育を受けられるのは、世界人口のわずか1パーセントであり、大半が大学に進学する現在の日本の若者たちは非常に恵まれた教育環境にいる）。彼らがいることで、私は後ろ髪を引かれることなく思い切って海外へと踏み出せるのである。

第四に、〈国際ボランティアや国際協力は相互性の関係である〉ということである。

例えば、人口問題を例に考えてみると、現在の世界人口は64億人であるが、今から20年後の2025年には80億人、2100年には100億人を突破するといわれている。地球の収容力は80億人までという見解もあるが、このまま対応策を取ることなく世界の人口が増え続けていくとどうなるであろうか。前章で述べたように世界中に食糧が行き渡らなくなり、エネルギーは枯渇し、そういった状況が新たな争いを生み出し、その戦争によって環境が破壊され、また食糧が不足するといった、すでに私たちが迷い込み始めている悪循環がさらに泥沼化し、人類は危機的な状況に陥るであろう。先進国に住む私たちが今と同じようなライフスタイルを断ち切らない限り、そして世界レベルでの「共生」がなければ、日本の未来もない。

また、個人レベルの国際ボランティアにおいても、それらの活動は単なる一方的な奉仕活動でとどまらず、むしろ援助する側が得るものも非常に大きい。そういった魅力があるからこそ、私を含む多くのボランティアが、新た

本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

な出逢いを求め、その人とひとの関わりの中で自己の成長を望み、さらなる一步を踏み出せるのである（これについては、紙幅の制約上十分に詳述できないため、関心のある方は本学の「国際ワークキャンプ（インドネシア）」各回報告書〈学生レポート〉をご覧ください）。

最後に、〈「愛情の反対は憎悪ではなく、無関心」〉という言葉からである。

こうした国際ボランティアや国際協力が、先述した人口増加に拍車を掛けるのではないかという指摘があるが、私たちは偶然に先進国に分類される日本に生まれたというだけであって、発展途上国で起こっている問題は私たちには関係のないといった無関心が、私は腑に落ちないのである。先の「愛情の反対は、憎悪ではなく無関心」という言葉は故マザー・テレサの言葉であるが、無関心ということは戦争よりも簡単で誰もがし得ることである。これまでに、私たちのその無関心がどれだけの人々を見殺しにしてきたのか、見て見ぬ振りをするほど残酷なものはない。

世界人権宣言の第1条において、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」と謳われているように、同じ命を持つ者として、決して誰かが犠牲になるような不平等があってはならないのである。

以上、私が常に持ち続けている自身への問い掛けでもあり、国際ボランティア活動に奮い立たせる原動力の根源となる考えである。

### Ⅲ 国際ボランティアのあり方

本章では、私が4年間行ってきた国際ボランティア活動の経験から、自身が把握し得た課題を明らかにし、それに応える方策を探求していくとともに、現在取り組んでいる啓発活動の意義を示していきたい。

## 1. 「国際ワークキャンプ（インドネシア）」の体験から

本学の「国際ワークキャンプ（インドネシア）」（以下、IWCと略記）は、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以来実施されているプログラムである。

このプログラムでは、学生が編成するキャンプ隊を主体的に運営しながら、「アジアの人々の協働から学ぶ」という精神を掲げ、インドネシア・バリ島にあるバリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設（パンティ・アスハン）の働きに参画させていただく。本学とバリ・プロテスタント・キリスト教会間で事業計画が定められており、私が参加した2002年度（第17回IWC）は、男子宿舎の改築を主とし、多目的広場予定地の土地整備と滞在先であるプリンビンサリ村内の研修センター建設のための土地整備を行なった。

### (1) 「国際ワークキャンプ」での過ち

ここでは、私が参加した第17回IWCでの経験をもとに国際ボランティアのあり方を考察していく。

#### i) 配慮に欠けた提案

私が参加した第17回IWCで最も配慮が欠けていたのは、エバリュエーションで提案した井戸の新設案である。エバリュエーションとは、本学学生及び教職員スタッフ、インドネシア人学生、バリ・プロテスタント・キリスト教会関係者が出席し、パンティ・アスハンに入所する児童の福祉向上、施設環境の改善を目的とした質疑、提案、評価の場である。

そこで、私たち日本人学生は、パンティ・アスハン滞在中に水不足になったことを受け、学生たち自身の判断で井戸の新設の提案と微力ながら支援するという旨をバリ・プロテスタント・キリスト教会に伝えた。

しかし、通訳を挟んだためか、相手側は、私たちが全額支援するという形で捉えてしまった。当初の日本人学生たちの考えは、帰国後に募金活動を行なうか、大学祭で模擬店を出店してのその収益金を寄付することにより、それを建設費用の一部に充てていただくことを考えていたが、井戸の建設費用

は、水脈の深さにもよるが数十万円から数百万円かかるとされており、募金活動などでは到底補えない金額である。最終的に、この件は白紙となったが、私たちが安易な提案をしてしまったことは事実である。

また、私たちの配慮が欠如していたのはこれだけではなかった。

仮に井戸を建設することができていたとしても、それによって様々な問題が考えられる。それは、以前、国連環境計画親善大使を務めた加藤登紀子氏が経験した次の事例から見ていきたい。

《アフリカに水不足の国があり、そこの人々は、二時間も三時間もかけて大きな地域にひとつだけある井戸まで歩いていき、水を汲んで、器を頭に乘せてまた二、三時間かけて自分の村まで帰って、それを一日の水として家族で分けて使っていた。先進国側は、それは気の毒な状態だから水道を作ろうと、そこに、先進国が経済援助により水道施設を建設した。しかし、一旦できた施設は整備をせずに放っておけば機能しなくなる。そういう教育はせず、ただ施設を建設して後は放任してくるとどういうことが起こるのか。

まず、水道の水は貴重であるという理由から料金を徴収することになる。それまでは、二時間かけてでもとにかく歩いて共同の井戸まで行けば、そこで自分たちが必要な分だけ瓶いっぱい水を汲めたが、料金を払わなければ水を得られない状況となった。さらに、水道施設の水のために周辺の井戸が枯れるという事態まで起きた。それだけでなく、数年経つと水道施設そのものが壊れて機能しなくなった》<sup>3)</sup>

加藤氏の事例は水道施設であるが、井戸の建設においても同様の問題が浮上ることが考えられ、この事例から学ぶべき点は多い。

まず一つ目は、水道施設を建設することが現地のニーズにそぐわなかったといえる。時間をかけてでも、必要な時に、必要な分だけ水を得ることができた建設以前の状況の方が、現地住民には好ましかった。

二つ目は、水道施設を建設したことで、周辺の井戸が枯渇したことにある。おそらく、建設前に十分に周辺地域を調査していたならば、こういった事態を予測できたはずである。

三つ目は、建設後のことを考慮した、メンテナンスに伴う知識と技術を習得するための教育がなされなかったことにある。井戸にしても水道施設にしても、機械である以上は、メンテナンスをしなければ早く老朽化する、あるいは故障する要因となる。また、もし故障した場合には、現地では調達できない機械や部品を用いて建設したのであれば、現地住民が知識と技術を持ち合わせていたとしても修復することはできない。動かなくなった井戸や水道施設は、何の意味ももたず、結局は環境破壊行為としかいいようがない。

四つ目は、加藤氏の事例にはないが、電力により水を汲み上げる様式ならば、そのための費用がかかるであろうし、先に述べたメンテナンス費用などの維持費がかかってくる。ここでは、それを誰が負担するのかも重要なポイントであろう。援助した側が継続して維持費を負担するのであればさほど問題は無いが、私たち第17回 IWC 参加学生のように、維持費のことを考慮せずに建設し、しかも援助される側が負担することとなり、その地域の経済状況が次第に圧迫され、しまいには維持費を支払えなくなってしまうことも考えられる。これもまた、先の問題と同じ環境破壊へと結びついてしまう。

私たち参加学生は、以上の可能性への配慮が欠けた安易で無責任な提案をするという過ちを犯した。しかしその経験から、発言における責任の重さと、何らかの援助をする際には最後まで責任をもって取り組むことの重要性を痛感した。

## ii) 現地の文化・風習の尊重

前項を踏まえ、国際ボランティアにとって最も大切な視点は、「現地の文化・風習の尊重」であるといえる。ここではまず、第I章において、ODA や NGO 団体の功罪が語られている、と述べたが、下記で ODA が非難されている事例を挙げ考察していく。

1996年、日本の ODA は約312億円をかけて、インドネシアのスマトラ島にコトパンジャン・ダムを建設した。それにあたって約5,000世帯23,000人が強制移住を強いられたが、補償された代替地が不毛の地であったり、伝統文化が崩壊することとなり、また建設による環境破壊を理由に、2002年に住



民約3,800人が日本政府、国際協力機構（JICA：Japan International Cooperation Agency）、国際協力銀行（JBIC：Japan Bank for International Cooperation）、日本企業を相手取り提訴した。翌年には新たに約4,500人の住民も原告に加わり、総勢8,400人の現地住民がダムの撤去と原状回復及び損害賠償を求めている。

この事例は、ODAに関して日本側が直接訴えられたはじめての事例であり、現在注目されている。これは現地住民のニーズにそぐわない、現地住民の文化・風習の軽視、十分な補償が成されない独善的な支援の結果といえるが、私はODAを批判をしているのではなく、援助方法に問題があることを指摘したい。

発展途上国であろうとも、アジア・アフリカには欧米の歴史をはるかに越える数千年の文化・文明が存在している。彼らのこの歴史を尊敬することなく、ある日突然外から来て、勝手に国際ボランティアや国際協力を始めるのは文化的侵略行為といえる。日本もその一つであるが、欧米諸国などの先進国の人間が援助をするとなると、自分たちの社会にある政治力、経済力、西洋医学、文化を基準とし、発展途上国も同じようにするべきだといった意識が働き、全部一色に塗りつぶしてしまう傾向がある。数千年築き上げてきた現地の人々の文化は、私たちが一朝一夕では語れない、自然やその土地の風土に密着した考え方がある。また、「郷に入っては郷に従え」という成句にあるよう、現地には現地の、向こうには向こうのやり方があることも心に止めておかなければならない。

このため、国際ボランティアを始める上で、まずは彼らの言葉で話し、現地の文化、風習、宗教、政治形態などを理解した上で、どういった援助が彼らにとって本当に役立ち、意味のある援助となるのかを汲み取る、またはそういった努力をすることを忘れてはならない。この多様な世界で「普通」、「当然」、「当たり前」といった概念は存在しないと考えると、善悪であるとか優劣であるとか日本人の勝手な<sup>も</sup><sub>の</sub><sup>さ</sup><sub>しで計ってはならない。そういった姿勢が、援助を受ける側との信頼関係を生み出し、押し付けではない援助の</sub>

実現へと結びつくのである。ただし、矛盾するようであるが、現地の人々と一定の距離をおくことも重要である。外から来た援助をする側は、彼らの文化を理解はするが、やはり大局的なものの見方をして、その国の未来にとって何が本当に大切なのかを、客観的に考えることも必要である。そういった意見を提案する際は特に、相手との信頼関係が根底になければならないことも確かである。

### iii) 持続可能な援助

現地の経済的支援を必要とする側に一時的に資金援助をしたり、短期間だけ医師が海を渡って医療活動をしたとしても、一時凌ぎな援助に終わり、根本的な解決にはならない。

また、ボランティアというと、お金や食べ物や薬を無料で与えることだと考えている方も多いかもしれないが、そういった援助を継続的に行なうとなると、改めて援助のあり方について考え直さなければならない。

貧困というのは社会全体の構造上の問題であり、貧しい人に一時的に、しかも短期間資金援助をしても何も改善しない。考えようによっては、資金援助を受けている側の意識は、資金援助をしてもらえるのが当然となってしまう、仕事をする意欲を失い、怠惰になっていく可能性もありうる。もしそういった依存状態に陥ってしまえば、その人あるいはその国の未来にとって好ましくない。

このような問題点を解決するために、現在各地で国際協力の主流になっている方法が「マイクロ・クレジット」と呼ばれる方法である。これはODA施策の一つ「無償資金協力」のようにお金を与えるのではなく、利子つきでお金を貸す方法である。このことにより、現地の人々は当面の生活をこの資金で工面し、また将来返済するために必死に働き、しかも一定期間内に返すため、より一層努力することを目的とする。

繰り返し述べるが、国際ボランティアや国際協力といった他者を援助するということは、ただ足らざるものを援助で補うのではなく、援助を受ける側の人々が自分たちで生産できるようになること、つまり、当事者自身が、自

## 本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

分の置かれた課題と向き合い、解決する力をつけることを第一に考え、そしてそのような過程を側面から援助し、自助努力に重きをおくエンパワメントに重点を置いた援助が必要となる。

また、教育が施されることにより、将来その社会を構成する人材を育成するため、基本的な国全体に教育が行き渡ることにより、未来に続いていくシステムの確立も非常に重要である。

### (2)「国際ワークキャンプ」の位置付けと可能性

それでは、ここで改めて IWC 参加学生の視点から、IWC の位置付けとその可能性について少し触れたい。

IWC は、具体的活動は社会福祉事業に関わる働きに参与し、参加費用は自身で捻出し、参加する者の自発性によって成り立つことにおいてはボランティア活動であるが、大学という教育機関が実施することにおいては実践的学習の場を提供することを意図した「全人的教育プログラム」であり、大学の建学の精神が鮮明に押し出されている。

現代の学生は、同じ学生である私から見ても、日常、主体的に何かに取り組むことや人と深く関わるのが少ない。そのため、自己の目標や未来像が欠如し、存在意義を喪失するなどアイデンティティの確立が困難となり、迷走しているように思われる。

しかし、IWC は参加学生の生き方にも大きな影響を与える。実際に、参加した学生たちは他者を助けるどころか、パンティ・アスハンの子どもたちやインドネシア人学生に励まされ、気づかされ、いわば甘えの許されない環境で「生きる力」を獲得し、エンパワーされて帰国する。そして、「なぜこの子どもたちがこういう状況に置かれているのか」、「このままではいけない」、「私にできることは何か」、「もっと知りたい」といった自立心、向上心、探究心、ボランティア精神が養われていく。

また、本プログラムでは「ふりかえり」(Reflection Time) という場を設けている。「ふりかえり」とは、その日に体験したことをふりかえり、仲間と分かち合い、消化する作業を示す。学生がバリ島で体験していることは、

仲間と分かち合う中で自分の言葉にしていくことで裏付け、経験として自身の中に構築される。また、他者の声に耳を傾けることにより、他者の経験までも自身の経験へと反映される。そして、他者との関わりの中で自己についての認識を深め、自分自身のあり方を省み、新しい自己の可能性を試みるなど、教育効果を向上させる効力を持つ。

### (3)「国際ワークキャンプ」参加学生の取り組み

では次に、そのIWCを通して、学生たちにどのような変化が表れたのかを見ていきたい。

これまで、IWCに参加した学生及び関係教職員により、バリ・プロテスタント・キリスト教会とのつながりを基に、毎年成績優秀学生に奨学金支援を行なう「バリ・スカラシップの会」、パンティ・アスハンの入所児童への日本語教育支援を行なう「NIPOBA」、国内でボランティア活動を行なう「チーム・ジャランジャラン」が設立された。

2001年には、本学の大学祭において、在学IWC参加者により模擬店、フリーマーケットが出店され、その収益全額をパンティ・アスハンの子どもたちの生活用品にあてる「シャンパー基金プロジェクト」が発足された。2005年度で5年目を迎えた「シャンパー基金プロジェクト」は、現在では屋内展示も追加され、全店舗で得た収益は、生活用品のみならず文具用品にもあてられている。そして2004年には、私はIWC参加者及び参加希望者とともに、後節から取り上げていく国際ボランティアサークル「らぶ&ピース」を設立した。また、参加者個々の活動も非常に活発であり、帰国後から積極的にボランティア活動などに取り組む学生は多い。

IWCを端的に表現する言葉に「ワークキャンプは、目的ではなくきっかけである」がある。これは、本学前チャプレンである齋藤壹氏の言葉であるが、この言葉を実証しているのは、先に述べたようにIWCに参加した学生たち自身である。参加して終わるのでは、ただの思い出づくりに他ならない。IWCを通して何を感じ、何を考え、帰国後何をしてきたのか、それによって自身がどのように成長し、今後何をしていきたいのかを明確にし、次のス

本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

テップにつなげていくことができてこそ、はじめて参加したことに意味があるのである。なお、その次のステップは、国際協力の世界でなくても構わない。IWCを通して、日本の児童福祉の分野に関心が高まったことで進路を変更する者もいれば、別に国際機関や NGO 団体に所属しなくとも、一般企業、マスコミ、教育機関などで世界に貢献していくことを目指す学生は実在し、それ自体は十分に可能である。また、そういった存在も欠かすことのできない「世界の市民」の一人なのである。

## 2. 「インド国際ボランティア」を通して

2004年、私は同年設立した国際ボランティアサークル「らぶ&ピース」の有志とともに、インド・コルカタにあるマザー・テレサが設立した“MISSIONARIES OF CHARITY”（神の愛の宣教者会：以下、MC と略記）が運営する施設「NILMAL HRIDAY」（死を待つ人の家）などにてボランティア活動を行った。

ここでは、その実施にあたっての事前研修の中で知り得た事例をもとに、ミクロとマクロの視点から国際支援のあり方について述べる（活動報告の詳細については、本学キリスト教センター発行「ボランティア活動報告書（第1号）」を参照されたい）。マザー・テレサの功績は世界的に有名であり、現に彼女が亡くなった今も、世界中から多くの人々が、マザー・テレサの施設でボランティアをするためにコルカタを訪れており、私自身、彼女のボランティア精神や数々の功績には深い感銘を受ける。

しかし、国際民衆保健協議会（IPHC）日本連絡事務所の代表である池住義憲氏によると、MC が設置主体で、路上に遺棄された子どもを収容する施設「SHISHU BHAVAN」（孤児の家）の設置によって大きな問題が急浮上したという。

それは、「SHISHU BHAVAN」やその他の児童福祉施設が設置されたと同時に、育児遺棄件数が増大する事態へと発展したのである。つまり、貧困家庭の親が経済的理由などから育児を断念し、養育を MC に依存する傾向

が出てきた。親たちは、シスターの目を引くよう故意に子どもに数日間食事を与えずに衰弱させ、早朝、シスターが通る路上に子どもを置き去りにしていたというのである。

その事態に対し、シスターたちは当初は子どもを抱きかかえて「SHISHU BHAVAN」などで保護を行っていたが、育児遺棄は止まることなく、後々、収容人数を超過したためにMCまでが保護を断念し、多くの子どもたちが路上で息を引き取ったという。

もし本当にそうであったならば、なぜ、このような事態に陥ったのであろうか。

私は、MCの活動は対処療法的な援助であると考えます。どういうことかという、MCの援助活動は、経済的、社会的理由により文化的、健康的な生活が送れなくなった路上生活者や、同じく経済的な理由などにより育児が困難なために捨てられた子どもを保護するところにある。しかし、そういった保護を行っている水面下では、自然に経済が豊かとなったり、誰もが住みよい環境にはならず、むしろ生活困窮者は増加していくであろう。特に、人口が急増し続けているインドではその可能性が高いといえる。ゆえに池住氏が述べた例のように、「SHISHU BHAVAN」でどれだけ子どもを保護しても埒が明かないのである。

MCの対処療法的な援助活動は、貧困などの社会問題をミクロとマクロの側面から考えた場合、目の前の人だけを援助するミクロ側の活動である。つまり対処療法的な援助活動や資金協力、食糧援助といった支援は、社会問題の要因を取り除くという活動ではないため、どれだけ献身的に働きかけても一向に根本的な解決とはならない。よって、日々いかに生きるかを考える路上生活者の数が減少するということは、この活動からは期待できない。

もちろんMCの諸活動を軽視しているのではなく、MCの援助の必要性を理解している。ただ、MCの路上生活者や育児遺棄された子どもたちの保護、「国境なき医師団」の緊急医療活動などのミクロ的側面への援助、あるいは一時的な経済支援と同時に、一方で諸課題の根本的な原因は何かを見極

## 本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

め、その解決に向けて働きかけること、特に当事者のエンパワメントを最終目標としたマクロ的側面での援助活動も重要であると私は考えている。

マクロ的側面の援助においては、これまで述べてきたように受給国内の経済格差の助長、将来性がない場当り的な支援、環境破壊など様々な課題を持っているが、そうした課題を受け、1990年代の「第四次国連開発の10年」では、①経済成長と富の公平な配分、②人口政策と人材育成・識字教育の浸透・女性の社会参加の促進・学校教育の拡充、③貧困の軽減と飢餓の除去、④環境への配慮、という課題が重視されるようになり、将来の世代が享受する経済的社会的利益を損なわないという「持続可能な開発」(sustainable development) が提唱された。これからわかるように、社会開発は、これまでの経済開発とは異なり、国家中心の援助ではなく、被援助国の人々が国民自身のために及び社会の福祉の向上のために継続的に活動する能力を育成、また社会制度の改変あるいは醸成であり、これは人間のニーズがすべての階層の人々、特に最下層の人々の間で充足されるよう、開発の中でいかに個人、特に社会的弱者の権利を擁護することを重視する間接的支援プロセスでなければならない。

なお、国際協力の世界では、単に何らかの問題が浮き彫りとなっても、実際、その問題はある個人、地域、国家が抱える問題の中の氷山の一角であり、しかも多くの問題が複雑に絡み合っているケースが多く一筋縄ではいかない。

そういった課題に直面した際、私たちに求められる資質は、物事を多角的に見ることのできる視点とその問題を解決するための知識、技術、そして経験である。

### 3. 国際ボランティアサークル「らぶ&ピース」の活動とその精神

先のインド国際ボランティアを実施した「らぶ&ピース」は、本学の学生により2004年に設立された国際ボランティア団体である。本学の建学の精神である『『世界の市民』の育成』の下、「世界の市民」として国内外で国際理解、国際貢献を目指しており、参加学生の関心に応じた多種多様な企画を立

案・運営している。

(1)「らぶ&ピース」の活動精神

「らぶ&ピース」が目指すものは、まさに本学の建学の精神「世界の市民」そのものであるが、それを実現するためにいかに取り組んでいくかが今問われている。

私が考える「らぶ&ピース」の活動精神は、「Think Glocally, Act Glocally, and Change Myself」である。

国際協力の世界において、「Think Globally, Act Locally」（地球規模で考え、身近なところから行動する）あるいは「Think Globally, Act Globally」（地球規模で考え、地球規模で行動する）といった概念が存在する。これは、南北問題、環境問題などの現在世界が抱えている問題と向き合い、海外であるいは身近なところで働きかけていこうという考え方である。

しかし最近では、1988年に日本の経済誌が発端となって普及した造語<sup>グローカリー</sup>“glocally”（“globally”と“locally”を組み合わせたもの）を用いて、「Think Glocally, Act Glocally」という概念が定着しつつある。これは、海外での国際支援活動のみに取り組むのではなく、国内でできることもたくさんあり、それにも積極的に取り組んでいこう、また、海外にばかり目を向けるのではなく日本国内の問題も見つめていこう、といった一方に偏ることのない意識や取り組みの必要性を表している。

そして私は、その概念に“Change Myself”を付加したいと考えている。これは、「らぶ&ピース」が毎年夏季休暇中に研修を行なう『地球市民共育塾『共生庵』』（広島県三次市）の荒川純太郎氏からヒントを得たものである。

それは、海外でのボランティア活動、学習会、研修、プロジェクトの企画立案やその運営を通して、参加学生の視野の拡大、知識・技術・教養の習得、語学力やコミュニケーション能力の向上、自己覚知（アイデンティティの確立）による、自己の成長を意味する。その成長が、次なる「Think Glocally, Act Glocally」の実現へとつながり、そうした活動から参加学生は「世界の市民」へと近づいていくと考えるからである。



## (2)啓蒙活動の重要性

「らぶ&ピース」では、その「Think Glocally, Act Glocally」の中でも“locally”を示す活動として、インド国際ボランティアなどの活動報告や講演会・写真展による啓蒙活動を実施している。前節までは、現場での国際ボランティアのあり方を中心に述べてきたが、現場での実践活動だけが国際ボランティア活動ではない。私は、それと同等あるいはそれ以上に重要な取り組みとして啓蒙活動に着目している。

以下では、「らぶ&ピース」がこれまで行なってきた啓蒙活動とその意図について述べよう。

「らぶ&ピース」を設立した2004年の10月、NPO法人「宇宙船地球号」理事・山本敏晴氏による講演会〔第1部「世界で一番いのちの短い国～シエラレオネ～」、第2部「本当に意味のある国際協力とは何か」〕及び写真展を開催した。講師である山本氏は、以前、「国境なき医師団」として西アフリカにあるシエラレオネ共和国にて緊急医療援助活動を行い、その経験に基づいて執筆した著書はベストセラーとなった。本講演では、その著書名を演題として、シエラレオネの現実と日本との関係性、そして山本氏が考える真の国際協力のあり方について講演いただくことで、聴講者（532名）に対して世界に目を向けることの重要性と国際協力の必要性の啓発を図った。

そして翌年4月には、インド国際ボランティアに参加した学生による活動報告会の実施、5月には本学学生サークル「MAPP」（Momoyama AIDS Project with Peers）との共催によるタイ・チェンマイにあるNGO「バーンサバイ」の青木恵美子氏による講演会『共に生き、共にエイズと闘う』を実現し、エイズへの正しい理解を目的とし、タイと日本のエイズの状況について講演をしていただいた。

そして2005年12月には、NGO「ペシャワール会」現地代表の中村哲氏による講演会『医者、井戸を掘るーアフガン、早魃との闘い』及び写真展を開催した。ここでは、イラク戦争の陰に隠れて世間から忘れ去られてしまったアフガニスタンの現実と、中村氏の活動から導き出された国際協力のあり方

について講演をしていただいた。

なぜこういった講演会や写真展を行うかという、それは、仮に私たちが国内外で活動を行ったとしても、支援できる範囲に当然ながら限りがあるからである。NGO 団体を例にしても、NGO 団体はそれぞれ規模も支援分野も異なり、一つの団体が世界中で、医療、福祉、教育、環境などの分野すべてを網羅することは不可能である。それに、それらの活動を実現するためには多額の資金と人材を要する。

しかし、国際協力として、募金や会員参加による NGO 団体支援、ピースウォークへの参加に近年注目されているフェアトレード商品の購入、ゴミの分別・リサイクル、買い物時にエコレジバッグを使用するなど、身近なところでもできる国際協力も非常に多い。私たちは、これらの啓蒙活動を行なうにあたって、海外に赴き学校を建設してください、といったことを主張しているのではなく、もう少し世界に目を向け、できる時に、できることを無理せず続けて欲しいという思いを持っている。

したがって「らぶ&ピース」が講演会及び写真展を開催する際、対象者は次代を担う本学の学生やその「世界の市民」を育成する教職員を主とするが、他大学の国際ボランティア団体や国際 NGO 団体を招待し、またマスメディアなどを活用して、近畿圏内に広く広報することで一人でも多くの市民の方々に来場していただくように努めているのである。

### (3)啓蒙活動における留意点

私は「啓蒙活動＝『世界市民』の育成」と考える。

ただし、こういった啓蒙活動をする際には、ただ国際協力に参加しなければいけないと訴えかけるのではなく、世界の現状を伝えることも重要である。そして世界の現状を伝えるにあたって、悲惨さを誇張せず、彼らも対等の立場の人間として認識するよう配慮しなければいけない。よく、現地の悲惨さを強調するような写真や文章が、新聞やテレビなどのマスコミを賑わしているが、悲惨さを強調すると、先進国側の私たちは、彼らは貧しいからただ単に食料やお金を恵んでやれば喜ぶだろう、といった同情的な考えになりやす

## 本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

い。この感情は、残念ながら本当に彼らが望んでいることを知ろうともせず、彼らを見下すことにつながっていき、私たちと対等の立場の人間であるという認識が薄れてしまう。

現地の悲惨さを伝えるための写真や文章を發表することはいいのだが、それと同時に彼らが私たちと対等の尊厳をもつ人間であり、すばらしい文化や歴史をその背景に抱えていることを伝えることも大切である。

### (4)もう一つのねらい

なお、私たちが啓蒙活動を行なうねらいとして、先述したように参加学生の成長を目指している。

講演会などの実施にあたって、私たちは講師やその方の活動に関する事前研修を行ない、講演当日には、講師の豊かな経験に基づいた講演内容から多くを学び得る。

しかしそれ以上に、講演会及び写真展の企画・運営を通して、プロジェクトに携わる学生たち自身が、「自ら判断し、行動する力」、そして「人類共通の立場に立ち、ともに考え、ともに生きる精神」を育むことができると、私は自身の経験により確信している。

また、インド国際ボランティアにおいても、報告書の作成や報告会を実施することで、国際ワークキャンプで述べたふりかえりの効果が期待できるとともに私たちの経験を他の学生にも還元することができるのである。

「らぶ&ピース」は、これまでの諸活動を継続、発展を目指すと同時に、本学学内の学生ボランティア団体間のネットワーク「桃山学院大学ボランティアネットワーク」（通称「桃大ボラネット」）及び本学ボランティアビューローとの連携を強化、また近畿圏を拠点に活動する学生による国際ボランティア団体やNGO団体とのネットワークを拡大していく中で新たな可能性を追求し、地域に根ざした上での社会貢献が望まれる。

#### IV おわりに —「世界の市民」の育成—

近年、「地球市民」といった言葉をよく耳にする。本学では『「世界の市民」の育成』（FOSTERING CITIZENS OF THE WORLD）を建学の精神に掲げているが、私は「地球市民」と「世界の市民」は、表現が違うだけであって指し示すものは同様であると考え。本章ではその建学の精神のもと、私が4年間にわたって活動してきた経験から「世界の市民」について再考し、本稿を締めくくりたい。

本学の「2005年度大学案内総合ガイドブック」によると、「世界の市民」とは《地球レベルでの課題が山積する現代に、世界の一員としての立場に立ち、問題を考え、解決する意識を持つことができる人材<sup>4)</sup>》としている。この定義は、すでに本稿で述べてきたことを総括されているが、この定義であれば、本学にはこれに該当する学生は、同じ学生から見てもすでに多く存在しているといえる。しかし私は、この定義では不十分であると考え。なぜならば、その問題を解決するためには、何らかの専門的知識と技術、そして語学を含めた広範な教養があってはじめて実現できるからである。

また、社会福祉を学ぶ学生の視点から「世界の市民」について考察すると、「国際ボランティアのあり方」で述べてきた精神と視点、つまり、現地の文化・風習を尊重し、現地のニーズを汲み取った上で当事者にとって本当に意味のある支援とは何なのかを見極める力とそれを実行・解決する力が、まさに「世界の市民」に求められる重要な資質であると考え。

以上より、私が現時点で考える「世界の市民」像を簡単にまとめると次のようになる。

「「世界の市民」とは、地球レベルでの課題が山積する現代において、世界を構成する一人の人間として人類共通の立場に立ち、自ら考え、行動する姿勢と、それを具体化する能力と精神を兼ね備えた人材」である。

さらに、「らぶ&ピース」の活動精神でも挙げた「Think Glocally, Act Glocally, and Change Myself」の〈Change Myself〉に着目し、国際ボラ

## 本当に意味のある国際ボランティアとは何か？

ンティア活動などを実践することにより、常に「世界の市民」として進化し続ける向上心も忘れてはならない要素である。

最後になったが、私は、これまでに「『世界の市民』とは何か」、「本当に意味のある国際ボランティアとは何か」を追求しながら活動してきたが、今はまだ扉を開いたばかりである。私は、今後も継続してこれらを追求しながら、「世界の市民」として社会に貢献できるよう、今後も広範な専門的知識と高度な実践的技術の習得はもちろん、国際的かつ多角的視点を養い、実践活動を続けていきたい。

### 注

- 1) ピースウォーク京都（編）[3] 94頁引用。
- 2) 中村哲 [4] 32頁引用。
- 3) 桃山学院大学キリスト教センター（編）[6] 34-35頁参照。
- 4) 桃山学院大学 [12] 3頁引用。

### 参考文献

- [1] NGO 活動教育研究センター（編）『国際協力の地平—21世紀に生きる若者へのメッセージ』、昭和堂、2002年。
- [2] 児玉克哉、佐藤安信、中西久枝（著）『はじめて出会う平和学—未来はここからはじまる』、有斐閣、2004年。
- [3] ピースウォーク京都（編）『中村哲さん講演録 平和の井戸を掘る』、石風社、2002年。
- [4] 中村哲『医者よ、信念はいらない まず命を救え！』、羊土社、2003年。
- [5] 池田香代子・マガジンハウス（編）『世界がもし100人の村だったら2 If the world were a village of 100 people』、マガジンハウス、2002年、80-81頁。
- [6] 桃山学院大学キリスト教センター（編）『出会い—キリスト教講演・談話集（14）』、桃山学院大学キリスト教センター、2004年、22-37頁。
- [7] 渡辺利夫・三浦有史『ODA（政府開発援助）日本に何ができるか』、中公新書、2003年。
- [8] 山本敏晴（著）『シエラレオネ：5歳まで生きられない子どもたち』、アートン、2003年、210-216頁。

- [9] 山本敏晴（著）『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ：望まれる国際協力の形』、白水社、2004年、155－187頁。
- [10] 国際ボランティアサークル「らぶ&ピース」（編）『ボランティア活動報告書（第1号）』、桃山学院大学キリスト教センター、2005年。
- [11] 国際ワークキャンプ実行委員会（編）『第17回 国際ワークキャンプ（インドネシア）報告書』、桃山学院大学キリスト教センター、2003年。
- [12] 桃山学院大学『2005年度大学案内総合ガイドブック』、桃山学院大学、2004年。